

出雲教育事務所 学び通信 第4号

ぐんぐん



発行日 平成28年7月15日(金)

発行：島根県教育庁出雲教育事務所  
(学校教育スタッフ)

住所：出雲市大津町1, 139番地  
電話：(0853) 30-5682

管内の各学校においては、平成28年度も子供たちの学力育成に向け、日々真摯に取り組まれているところです。

さて、出雲教育事務所では、管内の子供たちの学びがさらに高まることを願い、授業改善等の視点から提案を行うとともに、各学校の学力育成の取組の参考にさせていただくことを趣旨として、学び通信「ぐんぐん」を継続して発行することとしました。年3回の発行を予定しています。

出雲教育事務所は、5月23日(月)～7月7日(木)の期間、管内市町派遣指導主事等とともに管内92校の全ての小・中学校を対象に、学力育成に係る学校訪問指導を行いました。

第4号では、今回の学校訪問指導を通じて明らかとなった「**学力育成に向けた授業改善**」のポイントについて紹介します。昨年度の学び通信でお伝えしたことと重なる部分、言い換えたりする部分も多いですが、再度確認していただきますようお願いいたします。



## 学力育成に向けた授業改善7つのポイント

全ての学校の授業から、全教科領域等を通じた「学力育成に向けた授業改善の在り方」を7つのポイントにとりまとめました。

### ポイント1 「子供の声でつくる授業」を行っていますか。

授業の中で出てくる子供の考え、発言を見事に取り上げ、子供の声で授業がつけられる実践があります。子供が授業の主役であり、教師は子供の意見等を整理し、全体の流れの調整をする進行役となっている実践です。

一方、子供は教師の話だけをただ聞くだけで、板書をひたすら写すといった授業があります。このような授業スタイルでは、子供たちがその教科等を好きになるとは思えません。子供から出た意見が見事に取り上げられ、子供の多様な考えが生かされ、子供の学び合いの結果が授業のまとめになる授業こそ「学びの主役が子供」である授業であると言えるのではないのでしょうか。

このような授業を限られた1時間の中で行うためには、学習課題の絞り込み、めあて、展開、まとめ、ふりかえり等の在り方が問われることとなります。

### ポイント2 互いに何でも言える学級づくりを行っていますか。

子供同士が素直に、自然に意見を交換している授業を見ることがあります。間違いを言っても笑わない、またわからない時は友達が自然に助けてくれる学級では、授業中に子供たちが心を開き、自由に意見を言ったり、友達の意見をよく聞いたりしています。

日々の指導の中で、子供との信頼関係を構築する必要を強く感じます。学級づくりと授業づくりは学力育成に係る車の両輪です。

### ポイント3 「対話的な学び」の指導を行っていますか。

ペア活動で、子供同士がお互いの意見を交換したり、何がわかって、何がわからないのか確認し合ったりしている授業を見ることがあります。このような授業では子供同士が互いの思いや意見の内容を理解しようとします。相手が言おうとしたり、考えたりしている意図は何なのか探ろうとしています。

全国学力・学習状況調査の自校分析で、「状況また問題の意図が読み取れない」という課題が明らかになっています。状況また問題の意図が読み取れない要因として、授業の中で子供同士で話し合い、相手が何を言おうとしているか考えたり、その考えに意見を言ったりしながら、相手が何を言おうとしているのか予想する経験が不足していることが考えられます。

昨年度発表された中央教育審議会の「論点整理」で述べられている「アクティブラーニング」の視点に立った不断の授業改善においても、主体的・協働的な学びの重要性が謳われていますが、学びは人と関わってこそ深く、豊かになります。日々の授業の中で子供同士が、ペアであるいはグループ等の場で意見を交換する対話的な学びの過程をとることが重要です。

### ポイント4 授業の展開のスタイルが確立していますか。

めあての提示→学び合い→振り返りのスタイルで授業を行う学校が増えてきました。授業のスタイルが確立していることは、ユニバーサルデザインを意図した指導そのものであり、我々指導主事が短時間授業を見せていただいている場合でも、子供たちが安心し、学習に集中している姿を感じることが出来ます。

一方、本時の中心となる学習まで到達しない、あるいは個々が考えをつくる時間が延長され、授業が終わってしまうことがあります。1時間の授業の時間は限られています。1時間の授業のスタイルを確立し、それを繰り返すことで、子供たちも見通しをもって学習に取り組むことができます。

新たな学習スタイルを生み出すのではなく、課題提示→個人思考→ペア学習(グループ学習)等→全体討論→まとめ→振り返り等オーソドックスで子供同士が意見を交換し合う場が確保された展開を確立する必要があります。

教師の発問に対し、子供たちとの一問一答が繰り返される授業は、授業がどこに向かうのかわからず、また授業のねらいに到達しない可能性が高い場合が多く、よい指導とは言えません。

### ポイント5 見通し・振り返り学習の重要性について認識していますか。

子供の立場から、はっきりとめあてが提示され、子供たちがそのめあてに向かって学習に取り組んでいる授業があります。

我々指導主事が突然授業にお邪魔した際に、黒板等にめあてがはっきりと示されていると指導される先生が今何を指導しようとして、子供たちが何の学習に取り組んでいるのか一目瞭然です。授業の方向性がめあてではっきりとわかります。めあてが明確に提示されることは、なかなか学習に集中できない子供にとっても授業の途中で、授業がどこに向かっていくのか確認するよい手だてとなると考えられます。

さらに、めあて→学び合い→振り返りの授業スタイルを行う学校が多くなる中、次の段階としてめあて、振り返りの在り方が問われています。例えばめあてであれば、「子供の立場で」「子供にわかりやすい言葉で」「前時の学習とつながりをもたせて」等めあての在り方を検討していくことが必要となってきます。

### ポイント6 「知識」「活用」のバランスのよい指導を行っていますか。

評価の観点を踏まえた上で、本時の指導が、全国学力・学習状況調査で測られるいわゆる「知識」の指導を意図したものか、「活用」の指導を意図したものか、明確にする必要があります。1時間の授業の中で「知識」「活用」の両方が指導される場合、あるいはどちらかが指導される場合があると思います。この「知識」「活用」の指導がバランスよく指導されることでバランスのよい学力が身につきます。一般的には「知識」の指導に偏りがちです。「活用」の力が育たないということがよく言われますが、「活用」の指導の場が少なければ当然「活用」の力は育ちにくいわけで、指導者がこのことを意識し、バランスのよい指導を行うことが重要です。

### ポイント7 学校図書館活用教育の推進を図り、「本に手を伸ばす子供」を育てていますか。

全国学力・学習状況調査の結果から「活用」に課題があると判断している学校が多い現状があります。この「活用」の力を育成するために、学校図書館を活用した探究的な学習が必要であることを訪問指導の際にお伝えしたところです。全国学力・学習状況調査の「活用」に係る調査問題は、この指導の必要性を強く発信しているところです。

本好きな子供を育て、知的好奇心を育てるのはもちろんですが、子供が設定したテーマ、課題に基づき、必要な情報を得るために「本に手を伸ばす子供」を育てることは、情報活用能力を育てることにつながります。

教科領域等で一年を通して計画的にこの学校図書館活用教育を行うことが求められています。

